

ほんの些細なこと？ いや、福音の命取りに (1)

—ルカによる福音書 18 章 24～27 節—

矢野 眞実

²⁴ イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。²⁵ 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」²⁶ これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言
うと、²⁷ イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。(新共同訳
聖書)

聖書の言葉に向き合い、その意味するところを理解しようとするとき、時に「うん？」と思わされ
て、読み進めていたその手をしばし止められるようなことがありますし、ないでしょうか。ちょっとばかり「引っ掛かる」言葉や表現にでくわしたときなどです。そして、そんなとき、持てる知識を総動員
したり、あるいは生来の優しさを発揮したりして、事を分かりやすく、また受け入れやすくする。そ
うした傾向が私たちにはあるようにも思われるのですが、いかがでしょうか。けれども、「引っ掛か
り」があって スルツといかないところにこそ、聖書は大切な語りかけのエッセンスを隠し置いてい
るのではないか。そのようにも思われるのです。

初回の今回は、その種の好例として、いわゆる「^{らくだ}駱駝と針の穴」と呼ばれる^{たと}譬えから そのことを
考えてみたいと思います。古典的とも言える一例で、それはすでに御存じかとも思いますが、博識と
優しさと聖書の引っ掛かりを和らげ、誰にも読みやすく受け止めやすくしようとしたものでした。し
かし、その知識と配慮^{あだ}がかえって仇となり、聖書の福音の核心を^{つな}ぼかしてしまった。そのようにし
て まさに、ほんの^{ささい}些細なことが福音の命取りに^{つな}繋がりがねないことを暗示する一例となっているも
のです。聖書の箇所は「ルカによる福音書 18 章 24～27 節」。「マタイによる福音書 19 章 23～26
節」と「マルコによる福音書 10 章 23～27 節」が並行箇所になっています。

問題のポイントは要するに、25 節で言われている譬えをどう理解したらいいのか、ということデ
す。「駱駝が針の穴を通るなんて、そんなこと そもそも無理な話で、譬えとして成り立たないんじ
ゃないか」という、読む者たちの途惑いがそこにあるからです。そうした途惑いを受け、その注解書は
このところを次のように解説したのでした。出典は、ウィリアム・バークレー (柳生望訳)『ルカ福
音書』(聖書註解シリーズ 4) ヨルダン社、1973 年、254～255 頁 です。

イエスはさらにことばを続けて、富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしい、と言った。ラビは、非常に不可能なことを言うのに、しばしば、象が針の穴を通るという言い方をした。しかし、イエスのこの表現の由来は、おそらく次の二説のどちらかであろう。

(一) 一説によると、エルサレムの城壁には車馬も通れる大きな門と、そのかたわらに、人ひとりがようやく通れる小さな門があった。その小さな門は針の穴とよばれ、その小さな門を駱駝が無理に通るという図からヒントをえて、この表現が生まれたというのである。⁽¹⁾

(二) 駱駝というギリシャ語はカメロスである。この時代のギリシャ語には、母音が似かよる傾向があつて、異語でありながら同じように聞こえることばがいくつもあつた。ちなみにカミロス^{カミ}は船のもやい綱のことである。イエスの言ったことも、金持が神の国にはいるよりは、針の穴にもやい綱を通す方がもっとやさしい、ということであつたかもしれない。⁽²⁾ なぜそうなのか。所有物はなべて、人間の思いをこの地上に縛りつける傾向をもっている。この地上にあまりの利害関係をもつ人はそれから離れることを極度に恐れ、それ以外のものはいっさい顧みることがなくなるのだ。多くの富を持つことはそれ自体では罪ではない。しかし、それは魂にとって大きな危険であり、同時に大きな責任でもある。

つまり、「駱駝と針の穴」の譬えには、その背景として 2 つの可能性のいずれかがあつた。エルサレムの城壁の小さな門を駱駝が無理やり通る（上記⁽¹⁾）というものか、それとも 針の穴に何とかして船のもやい綱を通す（上記⁽²⁾）というものか、そのいずれかである。要点を絞れば、上の説明で言われているのはそういうことではないでしょうか。そして、もしそうだとしたら、そこには次のようなニュアンスが伴うことにならないでしょうか。すなわち、駱駝が針の穴を通るのはたしかに並大抵のことではないけれど、でも 100%不可能ということでもない。必死になって頑張れば、可能性は残されているかもしれない。そのような、^{かす}微かながらも、駱駝に（そして、この私たちに）望みを抱かせるニュアンスです。なかなか洞察に富んだ、人を^{うなず}頷かせる解説とも思われます。

ちなみに、出典の著者であるウィリアム・バークレーについては、訳書で以下のように紹介されています。

現代イギリスの代表的聖書学者。1947 年から〔スコットランドの〕グラスゴー大学で新約聖書学、コイナーギリシャ語の講座を担当。神学および聖書批評学教授を経て、現在、同大学神学部長。主著である聖書註解シリーズ、The Daily Study Bible（日々の聖書研究）は、現代神学の成果を神学用語を使わずに一般信徒に伝えることと、新約聖書の教えを今日の日常生活に密接に関連づけることを意図して書かれたものである。新約聖書と同時代のユダヤ、ギリシャ、ラテンの古典を縦横に駆使し、加えて文学的味わいの深い叙述で状況再現を試み、新約のメッセージを信徒にきわめて説得的に訴える。この魅力的な労作は、すでに世界各国の広範な読者から圧倒的支持を獲得している。

実際、訳書が刊行されて以来、この聖書註解シリーズは日本でも長い間、多大な人気を保ってきました。広範な知識に基づいていて、しかも、平易な文章で分かりやすく書かれているからです。その

意味で、日々の聖書の学びを助ける 良い参考書と言えるでしょう。ただ、「駱駝と針の穴」のこの箇所に関しては、著者の博識ゆえの、また優しさゆえの緩さと甘さが見られるように思うのです。なぜならば、著者が挙げた 2 つの可能性はより丁寧な調査研究によって、そのいずれもが認められていないからです。そして、その緩さゆえに、譬えで語られている福音の核心が見失われかねないからです。

背景としての 2 つの可能性については、次の書がかなりの詳細さで これを論じています (関連の部分全体を下に書き出してありますので、御覧ください)。

Kenneth E. Bailey, *Poet & Peasant and Through Peasant Eyes: A Literary-Cultural Approach to the Parables in Luke*, Combined edition, William B. Eerdmans Publishing Company, 1983.

著者のケネス・E. ベイリー (Kenneth E. Bailey) は米国聖公会のピッツバーグ教区主教座聖堂参与神学者でしたが (2016 年没)、少年期をエジプトやエチオピアで過ごすとともに、40 年余りにわたって (1955~1995 年) 中東地域で研究や教育に携わりました。その範囲はエジプト、レバノン、パレスティナ、イスラエル、キプロスと、広範に及んでいます。この間、1962 年から 84 年にかけて バイルートの近東神学校 (the Near East School of Theology) で、また 1985 年から 95 年にかけては エルサレムのエキュメニカル神学研究所 (the Ecumenical Institute for Theological Research) で新約聖書学などを担当し、^{きょうべん}教鞭を執っています。ちなみに、邦訳書としては、(上掲の書とは違いますが) 森泉弘次氏訳で『中東文化の目で見たイエス』(教文館、2010 年) が出版されています。

著者ベイリーはこのような現地・中近東の社会的・文化的背景に精通し、そのことで名を知られた学者ですが、そのベイリーが上掲の書でまず「駱駝 (κάμηλον < κάμηλος, -ου, ὁ)」と「綱 (κάμιλον < κάμιλος, -ου, ὁ)」の語違いという (上記バークレーの) 第 2 の可能性に言及し、「この選択肢はすでに、Ibn al-Tayyib によって 11 世紀に放棄された (This option was already discarded by Ibn al-Tayyib in the eleventh century)」と指摘しているのです。そしてそれは、聖書写本の写し手が本文の表現を和らげ、救いがなんとかして富める者にも可能になるようにしようとしたからだろうと推測しています。富める者もそれなりに懸命に頑張れば・・・と。しかし、ベイリーは言います。^{いとひも}糸紐のような細い縄とそれに見合うだけの大きな針を想い浮かべれば、それはたしかに難しくはあるけれども、不可能ということではなくなる。けれども、その裏付けは弱く、説得力に欠ける、と。そこに潜む福音理解の落とし穴を見抜きつつ、そう記しているのです。(下記⁽¹⁾)

「小さな門」の可能性についても同様です。すなわち、中東の村では時に、通りから中庭に入る扉として、大きな扉の中に小さな扉が組み込まれた二重の組合せ扉が見られるといいます。大きいほうは荷を積んだ駱駝が中に入るとき、小さなほうは人が普段 出入りするときに使われます。この二重扉に目をつけ、小さなほうのこの扉こそが譬えの「針の穴」だと、かつてそのように解説した注解書が幾つかあったと ベイリーは語ります。(下記⁽²⁾) しかしながら、ベイリーはそのうえで、シェー

ラー (Scherer) という学者の言葉を引用して 次のように言うのです。「わずかなりとも、こうした同一視を裏付ける証拠は存在しない。この扉はいかなる言語においても 針の穴と呼ばれてこなかったし、今日もそのようには呼ばれていない (There is not the slightest shred of evidence for this identification. This door has not in any language been called the needle's eye, and is not so called today)」(下記⁽³⁾)。これは、ベイリー自身の経験からも言えると言えます。

ベイリーは (さらに他の知見をも交えつつ) このようにして、「駱駝と針の穴」の譬えが本来意味するところを結論として記しています。それは、綱や縄の解決策も小さな門のそれも、いずれも本文の真意を巧みに言い繕おうとするもので、間違った理解の仕方と言えよう。そうではなくて、譬えは意図的に 具体的描写をもって全く不可能なことを提示しているのであって、(エリスの言葉を借りて ^{いわ} 曰く)「まさしく文字どおりに受け止められねばならない (is to be taken very literally)」というものです。(下記⁽⁴⁾) そのようにして、ベイリーは譬えのエッセンスを次のようにまとめています。

「救いは神の^{みわざ}御業として確言されている (Salvation is affirmed as an action of God)」(下記⁽⁵⁾)。「〔永遠の命を〕受け継ぐのは賦与されてのことであって、獲得した権利としてではない (An inheritance is a gift, not an earned right)」(下記⁽⁶⁾)。「救いというのは人間の手では不可能なことであり、神によって可能になるのである (Salvation is impossible with men and possible with God)」(下記⁽⁷⁾)

The two sets of three lines are parallel, yet there is progression. Entering the kingdom through reliance on possessions and wealth is hard (1); indeed, it is impossible (2). Anyone with possessions has a natural tendency to want to earn his way into God's good graces. It is hard, indeed impossible, both to set aside this drive to "make it on one's own" and to accept grace.

In the history of interpretation there are two attempts to soften the blow of the text. One attempt is linguistic and very ancient. It involves a change of a Greek vowel. Rather than *kamelon*, if we read *kamilon* (as some ancient manuscripts give us) we are not talking about a large, four-footed animal but rather a rope. Thus, if you imagine a thin rope (string?) and a large enough needle, it becomes difficult, but not impossible, for the rope to be pulled through the needle. It would appear that some copyists in the early centuries tried to soften the text and make salvation somehow possible for a rich man if he tried hard enough. Yet the textual evidence for "rope" is slight and unconvincing. This option was already discarded by Ibn al-Tayyib in the eleventh century⁽¹⁾:

Some say that the word "camel" in the text means a thick rope. Others think that it is the large beam that provides support for the foundation of the roof, and

others say that it simply means the well-known animal; and this is the correct opinion (Ibn al-Tayyib, Manqariyus edition, I, 323).

A second alternative comes from the Middle Eastern village scene. Here peasant homes sometimes have a large set of double doors that open from the street into the courtyard of the family home. In the village these doors must be large enough to allow the passage of a fully loaded camel. Thus the doors must be at least ten feet high and together some twelve feet wide. Such doors are constructed of massive timbers. So much manpower is required to move them that they are opened only when loaded camels are transporting something through them. The ordinary movement of people in and out of such doors is facilitated by a small door cut in the large door. This small door is easily opened. In the past some commentaries explained that this is the "needle's eye" of the text.⁽²⁾ F. W. Farrar quotes private correspondence recollecting travels in the Middle East in 1835 in which the correspondent did find such a door called the needle's eye (Farrar, 375f.). Yet a few years later Scherer, a longtime resident in the Middle East, wrote bluntly, "There is not the slightest shred of evidence for this identification. This door has not in any language been called the needle's eye, and is not so called today" (Scherer, 37).⁽³⁾ Our experience substantiates Scherer. In any case, Farrar himself opts against this correspondent's suggestion in favor of evidence from the Talmud.

In the Talmud Rabbi Nahmani suggests that a man's dreams are a reflection of his thoughts. We are then told,

This is proven by the fact that a man is never shown in a dream a date palm of gold, or an elephant going through the eye of a needle (B.T. *Berakhoth* 55b, Sonc., 342)

That is, a man is never shown something that is clearly impossible. The elephant was the largest animal in Mesopotamia and the camel the largest in the Palestine. In each case we are illustrating something that is quite impossible, as the text itself affirms (v. 27). We would see both of the above attempts to explain away the thrust of the text as misunderstanding of it. The parable deliberately presents a concrete picture of something quite impossible. As Ellis succinctly states, "The camel-needle proverb (25) is to be taken very literally. Anyone's salvation is a miracle" (Ellis, 219).⁽⁴⁾ A rich man (through his own efforts) *cannot* enter the kingdom. The decision to dethrone his wealth he cannot make unaided. The profounder levels of the theological content of the parable miss the bystanders.

What they do understand is that rich men cannot themselves enter the kingdom.

The bystanders' question emerges out of a special mentality. This mentality says,

Rich men are able to build synagogues, endow orphanages, offer alms to the poor, refurbish temples, and fund many other worthwhile efforts. If anyone is saved, surely it is they. Jesus says that such people cannot enter the kingdom by such noble efforts. We commoners do not have the wealth to carry out such noble deeds. Who then can be saved?

The ruler found the demands of Jesus too hard. The bystanders echo this feeling and shape it as a question.

We have noted the fact that just past the center of an inverted literary structure there is usually a point of turning. Something crucial is usually introduced just past the center that informs the entire passage. True to form, a key statement of this kind appears at precisely this point in this structure. Salvation is affirmed as an action of God.⁽⁵⁾ No one unaided *enters* the kingdom. No one achieves great things and *inherits* eternal life. An inheritance is a gift, not an earned right.⁽⁶⁾ No one has rights in the kingdom, not even rich men with all their potential for good works. Indeed, if Jesus had given the rich man a list of expensive good works to be funded or carried out, the ruler would likely have begun on them with great enthusiasm. Rather, he is told that his best efforts are worthless in the achievement of his goal of *entering* the kingdom. Salvation is impossible with men and possible with God.⁽⁷⁾ As Marshall succinctly states, "God can work the miracle of conversion in the hearts even of the rich" (Marshall, 686).

In conclusion, then, what is the response expected from the ruler and what cluster of theological motifs comprise the theological content of the passage? The ruler is pressed to understand that eternal life is not inherited through good works but *received* by those who allow God to work the impossible within them. The ruler's ability to do good works (through his wealth) proves only a stumbling block to his humble acceptance of a miracle of grace that could enable him to respond with the radical obedience demanded of him.

("Through Peasant Eyes," pp. 165-170)

少しばかり長くなりましたが、こうした説明の違いを見てきて、私たちはそこから何を学ぶことができるでしょうか。何を学び取らねばならないのでしょうか。要約するなら、それらは次のようなことのように思われます。

1. 背後にある社会的、文化的、歴史的背景を正しく理解すること
2. 事柄の裏付けを確実にすること
3. 前後の文脈のなかで、本文を読み取ること

「駱駝」と「綱、縄」の語違い論も「小さな門」の「針の穴」論も、どちらもこれらの点で正確さに欠けると言えるでしょう。エルサレムの城壁に「針の穴」と呼ばれる小さな門があったという一説にしても、ベイリーはそのこと自体についてはたしかに論じていませんが、現地の地理や歴史に詳しいベイリーです。そのような門があったとしたなら、当然のこと、知らないはずはないのではないのでしょうか。実際、26 節を見ると、次のように書かれてもいます。「これを聞いた人々が、『それでは、だれが救われるのだろうか』と言った」。つまり、誰一人 救われないではないかと、彼らはそう受け取ったのでした。エルサレムへと向かう途中、エリコ近郊でのやり取りです。エルサレムに「針の穴」と呼ばれる門があったとしたなら、その地に暮らす住民がそのことを知らないはずがありません。そして、もしそのような門があつて、そのことを知っていたとしたなら、彼らの応答は少しく違ったものになっていたはずで「それは大変だ。なかなか難儀なんぎなことだ」などと。しかし、彼らがそうは言わずに、代わりに「それじゃあ、誰一人 救われないじゃないか」と返答したということ。それこそまさに、そのような門はなかったということの証しと言えるように思います。

そこで、最後の一点です。

4. 文中の「引っ掛かり」を大切にし、安易に 小手先の辻褄つじつま合わせに走らないこと

聖書を読み進めるとき、往々にして気づかされるのは、引っ掛かるそのところにこそ メッセージの核心が隠されているということです。それを安易に解釈し、通りのいいスルツとしたものにしてしまうと、福音や信仰の本質を見失うことにもなりかねません。事実、「駱駝と針の穴」の譬えは 27 節の次の言葉で締め括くくられています。「人間にはできないことも、神にはできる」。この不可能と可能の対比にこそ、譬えの核心があることは明白でないでしょうか。駱駝が針の穴を通るのは絶対に不可能のように、人間が自分の手で救いを得ることは万に一つも不可能なのだ。しかしながら、御自身の恵みの御業によって、神がそのことを可能にしてくださる。それが「駱駝と針の穴」の譬えの中心のメッセージと言えるでしょう。その点をいささかなりとも和らげて緩くするようなことがあれば、私たちはそのとき、自分の力で救いに入ろうとする誘惑に落ち始めていることを知らねばならないと思います。それはすなわち、「信仰による義認」から外れて「行為による義認」へと傾き始めているということでもあります。ですから、事は決して小さなことではないのです。

ほんの些細なことに見える事柄が、実は福音の命取りにもなりかねない。今回はその古典的な一例を御一緒に見てみました。博識と優しさの中に潜む落とし穴に気をつけたいと思います。優しさ一つとっても、イエスの言われるそれは巷ちまたに溢あふれるような薄っぺらなものではなく、深さと厳しさと重さを携えたものと思われるからです。

次回は、いま一つの箇所から、福音の命に関わる読み取りについて考えてみたいと思います。

【参考】

御参考までに、手元にある注解書の中から、「駱駝と針の穴」の箇所を扱った説明の幾つかを以下に書き出しておきます。

K. H. レングストルフ（泉治典、渋谷浩訳）『ルカによる福音書』（NTD 新約聖書註解 3）NTD 新約聖書註解刊行会、1986 年、444 頁。

²⁵ ここで役立つものは完全な断念の決断あるのみ。そのことをイエスが明言された言葉は、諺を写し取ったもので 文字通りの意味に解されてよいであろう。

²⁶ 驚いた聴衆 — 全体として救われる可能性がありそうな人々 — の質問は、彼らの一人一人がどんなに僅かなものでも とにかく財産に依存していた以上、避くべからざるものであった。

²⁷ しかしイエスは、財産に依存する人間がいつのまにか落ち込む墮落ぶりをはっきりお示しになったので、今や割引なしの福音をもって 聴衆の限界にお答えになる。神は御自分の御国を欲し給う。彼は御国を 人間が置いたあらゆる障害を克服して建て給うであろう。神の国はもちろん ただ受け取られるだけで、決して獲得されるものではないからである。

三好迪『旅空に歩むイエス ルカによる福音書』（福音書のイエス・キリスト 3）講談社、昭和 59 年、191～192 頁。

ルカにおいては、大金持の役人はイエスの言葉にもかかわらず、その場から立ち去らず、イエスはその役人の前でペテロらにいうのである——「イエスは、彼（役人）の様子を見ていった。『財産のある者が神の国に入るのは・・・』」。こうしてルカは、大金持の役人とイエスの言葉のやりとりと、弟子たちへの永遠の約束までの伝承を結びつけ、これらを一場面にまとめている。

ここでのポイントは「大金持」が「持っているものを一切売り払い、貧しい人々に分配してからイエスに従え」（22 節）というぎりぎりの二者択一的状況において、イエスの弟子入りの本質が露呈されるからである。

I. Howard Marshall, *Commentary on Luke*, New International Greek Testament Commentary, William B. Eerdmans Publishing Company, 1979, pp. 687-688.

(24) δυσκόλως is 'hardly', and πῶς δυσκόλως should be translated 'with what difficulty'. χρῆμα, plural, 'wealth', is found here only in the Gospels.

(25) The statement is a hyperbolical expression of what is impossible; it has a rabbinic parallel in a saying about the impossibility of an elephant passing through the eye of a needle, but this is not attested until the third century AD and could be

based on the saying of Jesus. κάμηλος is 'camel'; κάμιλον, 'rope', is a late attempt to tone down the saying. τρήμα is 'opening, hole', which is rare. βελόνη, 'needle', is a more literary word than Mk. ῥαφίς.

(26) Luke omits the note of surprise on the part of the hearers recorded by Mark, and inserts the generalising οἱ ἀκούσαντες to bring out the universal significance of the saying of Jesus. 'To be saved' is the same as 'to enter the kingdom' (cf. 13:23f.). The implied thought is: 'If even the rich (whose prosperity is generally regarded as a sign of blessing) cannot enter the kingdom, how can anybody else enter it?'

(27) Luke again omits Mark's ἐμβλέψας. He shortens Mark's saying into a brief, pointed one. The things that are impossible for men to do are possible for God (note the inversion ἐστὶν παρὰ τῷ θεῷ). It is impossible for a man to break free from the lure of riches—even at the command of Jesus. But God can work what is impossible, although how this is related to human response is not indicated.

加山久夫「ルカによる福音書」『新共同訳 新約聖書略解』(山内眞監修) 日本基督教団出版局、2008年、215頁。

23 《貧しい人々》は彼にとって愚か者、怠け者であり、神の祝福から排除されている者。そのような人々のために施しをすることは、彼にとって 財産を売り払うことをさらに困難にしたにちがいない。たとえば、神殿のために寄進し、自らの名を高くするためであれば、それはより容易であったであろう。イエスにとって、議員の本来の関心事である「永遠の命を受けること」(つまり、神の国に入ることは所有(この世的束縛)から自由になって、まず貧しい人々が招かれている神の宴会に与ることである。跳躍できないこの大きな距離のゆえに 彼は《非常に悲しんだ》。富める者の不幸。24-27 金持ちが神の国に入ることは不可能ということか。然りと否。《人間にはできないことも、神にはできる》(27 節)。神には富める者をも変えることが出来る。徴税人ザアカイの場合のように。

Noval Geldenhuys, *Commentary on the Gospel of Luke*, The New International Commentary on the New Testament, William B. Eerdmans Publishing Company, 1979, pp. 459-460.

24, 25 He pointed out to his disciples how hard and humanly impossible it is for a rich man to be saved—because one who is rich is so easily dominated by his wealth and held prisoner by a blind attachment to worldly possessions. Just as it is impossible for a camel to go through a needle's eye, so it is impossible, humanly speaking, for a rich man to be saved. No one is able, in his own strength, to overcome the temptation of earthly wealth—whosoever tries in his own strength to

wrest himself free from the satanic hold of love for worldly riches, will always fail.

26 Because it was the general view among the Jews at that time that wealth was a sign of God's special favour towards the owner of it, and that poverty was a punishment for the sins of the poor, the hearers ask in amazement who can then be saved—if even the rich ones have no chance, how much less ordinary people and the poor?

27 Jesus, however, replies that the things which are impossible with men are nevertheless possible with God. Humanly speaking, it is impossible for a rich man (or anyone else) to be saved, but through the grace and might of God the rich as well as the poor may be saved.